

チューギェル・ナムカイ・ノルブ 布施の心と施主の徳

古代、ブッダ・シャキヤムニが生きていた時代がどんなであったかを語る、多くの物語が残されています。Khyimdag(裕福な在家の人々)やjindag(施主)と呼ばれた人はブッダとその弟子たちを彼らの国に招きました。ブッダはそこで聖なるダルマを、機会に恵まれた衆生に授けたのでした。すなわち裕福な彼らは布施の修行をおこなったのです。それは六波羅蜜の第一にあたるもので、非常に大きな功德を積むことになりました。布施は菩薩としての最上の行為とみなされています。このことについて、次の例からもわかることでしょう。

大乘(菩薩乗)教典の中に大変有名な話があります。ブッダ・シャキヤムニの時代、中国にハシヤンという裕福で有力な地主がいました。彼はブッダをどうしてもインドから中国にお招きしたいという、強い信仰心と願いを持っていました。しかしインドと中国は遠く離れており、ここを旅するのは大変に困難なことでした。彼は、自分の願いを叶えることは難しいということがわかっていたのです。彼は考え続けました。「どうしたものだろう?」と。すると、一人の賢いブッダの信者が彼に言いました。「ブッダ・シャキヤムニをインドから中国にお招きするのは大変難しいとお考えでしょうが、ブッダは全能なお方なのですから、彼を昼食にお招きしたいと、心から願うことです。そうすればブッダと弟子である神通力をもった阿羅漢たちは昼食にやってくることでしょう!」

大地主のハシヤンは、言われた通りに昼食の準備を整えました。やがて昼食の時間になるとブッダは、十六羅漢として知られる神通力を持った阿羅漢たちを連れハシヤンの家に来て、彼の望み通り昼食をともしましたのでした。今日、中国とチベットの仏教の聖地のほとんどはこの十六羅漢がまつられています。これはブッダとその弟子たちが神通力によって中国を旅したときの物語に発するものです。大地主ハシヤンがブッダとその弟子たちを招いたことは非常に大きな功德を積んだこととなりました。この時以来、中国やチベット、モンゴルでは、ハシヤンの像を安置すれば、ハシヤンの築いた功德の力によって、幸運や富が増大すると信じられ、すべての家にハシヤンの像がまつられることとなったのです。ただし、ほとんどの人はこの物語のことを知りません。また西洋においては、ハシヤン像をブッダと思い込んで持っている人がいるようです。

秘密真言乗の教えの中にこんな物語があります。ブッダ・シャキヤムニが生きておられた時代、ウッディヤーナ王国にたいそうな力をもったインドラブーティという王がいたと言われていました。彼はたいそう信心深く、ブッダに深く帰依をしていたので、ブッダの弟子であった学者たちを招いて、王家の祭司として迎え入れました。ある日、王は彼らに向かって言いました。「私には、ブッダ・シャキヤムニをこのウッディヤーナの地にお招きしたいという大きな願いがあるのだが、インドとウッディヤーナはとても離れているし、ここまでの旅は危険に満ちており大変なものだ。ブッダにお目にかかる幸運はどうやら私にはないかもしれない。来ていただけるに値する徳もないのだろう。ああ、いったいどうしたものだろう?」

彼は悲しみました。しかし学者たちはそろって王に申しました。「ブッダ・シャキヤムニは全能のお方ですから、きっとあなた様の願いをご存知のはずです。彼には神通力がありますから、王が心から祈願して昼食にお招きすればブッダは奇跡の力でもってやってくることでしょう。王はブッダにお会いになれるのです！」

そこでウッディヤーナの王は、学者たちの助言通り、昼食の準備を完璧に整えてから、真剣に祈りました。昼食の時間になると、ブッダはウッディヤーナの王宮に、神通力をもった彼の弟子とともにやってきたのです。ブッダと彼の弟子は食事を終えると唱えました。

「この、かくも素晴らしい捧げものの力によって、すべての衆生がただちにさとりをうることができますように。そして過去仏によって解脱することができなかつたすべての衆生も、この布施の功德によって解脱することができますように。」

この祈りが終わると、ウッディヤーナの王はブッダに申しあげました。「世尊(バガヴァン・ブッダ)よ！私にはあなたの教えに従い、そして最高の解脱へ至りたいという、およそ計り知れない程の願いがあります。しかし私には王としての、そして私の家族に対する責任というものがあります。この責任を放棄して僧侶となることはできないのです。ですからあなたの教えを修行することもできないであります。」

世尊はこれに答えて言います。「偉大なる王よ！聖なる教えに従い修行することは、それぞれの立場や能力に応じたものでなければならないのです。さまざまな立場の人がいるのだから、聖なるダルマの道を歩もうとする全ての者が、家族を捨て僧侶となり放棄の道をただ歩んで行かなければならない、ということではないのです。煩悩や楽しみを放棄することなく、変化の道を通してさとりを得ることができる高い能力をもった者のための、深遠なるウパデシャの教えがあるのです。」

そこでウッディヤーナの王は、「世尊よ、どうか私にその素晴らしい教えを与えてください！」とお願いしたのでした。こうしてブッダは、王がブッダの特別な弟子となり、グヒヤサマージャ(秘密集会)曼荼羅ならびに本尊として瞬時に顕現されたのを見届け、金剛乗の深遠なる変化の道ウパデシャのすべてを伝授したのです。これがグヒヤサマージャ(秘密集会)の中で語られていることです。このようなことから、また秘密真言乗の教えの起源からも、施主であることの重要性が理解できるのです。

ブッダの化身である菩薩たちが大乘の道に入り、崇高な菩薩行の実践をはじめた時、彼らは、六波羅蜜に専心しました。すなわち、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六波羅蜜です。最初の布施波羅蜜は、さらに法施、財施、無畏施の三つに分けられます。

法施

最高の布施は、苦の大海から衆生を救う聖なる教えを布施することです。もちろん師が解脱への道を直接教え、衆生の幸福を願いながら聖なるダルマを完全に伝授することができるならば、この法施は最高の布施となるでしょう。とはいえ、このような力を持っていない人であっても、純粋な意図でもって、師にダルマを伝授していただけるように、直接あるいは間接を問わず助力したり環境を整えたりして、これまで法を受ける機

会のなかった不幸な衆生にその可能性を作ってあげることも、非常に大きな法施なのです。

財施

財施とは、大小にかかわらず善意でもって財物を布施することです。ここにはいかなる見返りの期待もありません。また提供する者と受取る者という考えもなく、あるいは貧者に施すという考えもないものです。大洋を生きる場所とするものへの「水の布施」や匂いを糧として生きる存在への「焼かれた捧げもの」などもすべて財施に含まれます。実のところ、貧しい求道者に対して、聖なるダルマを聴き、学び、そして修行することのできる機会を提供することで最上の布施をしようとする裕福な者の行為は、法施と財施は不可分であるということにおいて、これに勝るものはない行為であるとされるのです。

無畏施

全ての衆生は、「八つの大きな恐怖と十六の恐怖」に死ぬまで苦しみます。直接であれ間接であれ、このような恐怖からできるだけ守り、逃れられるよう手助けをすることを無畏施と呼びます。しかし、先に説明したように法施と財施の行為は密接な関係があるように、当然無畏施もこれらの行為と不可分であるのです。私たちはみな、カルマや煩惱という観点からいえば、実にあわれな存在であり、サンサーラの大海の、果てることのない苦の中に閉じ込められています。まさに肉屋の手にかかった動物の如く、終わりのない恐怖に苦しめられているのです。このような状態から私たちを解放へ到達するためには、ダルマは最上の師から与えられ、聴き、学び、そして修行されなければなりません。従って、恵まれないものたちが、聖なるダルマに従い、彼らがサンサーラの恐怖から解放されるように必要な条件を提供することは、極めて大きな無畏施であると言えるのです。このような三種の布施の本質において、そして特に法施において、二元論の中に生きる私たちにとって、この優れた行為を正しく修行になかに取り入れ、かつ「行為は時と場所に応じたものでなければならない」という原則によることがとても大切なことなのです。

布施のすぐれた行為を修行に取り入れる方法について

いつであっても、またいかなる国においてであっても、真正で聖なるダルマを教える師をお招きし、伝法会を行いたいならば、その大小にかかわらず、ゾクチェンコミュニティの責任者であるガンチーがまず、コミュニティの希望を完全にくみとって決めなければなりません。古代から今にいたるまでいつの時代でも、地位や権力、富を、ダルマの力によって手に入れようとするなら、それはまさにダルマに反する行為であり、ダルマのために苦勞をいとわず出来る限りの忍耐をもってあたることは、ダルマにかなう行いであることは明らかなことです。もし法会のために、ダルマの教えを受けようと願う人たちに参加費を求めようとするなら、これは正しい行為でないこととなります。とはいえ、現代にあって、修行者の願いをかなえるために師をお招きしようとするなら、師の旅費や滞在費、法会を開催する場所の費用など、多くのお金がかかることとなります。これらのことを考慮しないとすれば、およそ伝法会を開くことはできないでしょう。これらの費用を参加者に課すことは、聖なるダルマの原則に完全には一致しなくても、これまでは時や場所の制約によって考慮せざるを得ないことでした。従って伝法会に参加するすべての修行者に参加費を求める必要があったのです。

将来は、聖なるダルマの原則に合致させるため、また「時と場所に応じた行為」を本当の意味においての修行とするため、すべてのゾクチェンコミュニティのガンチーは、コミュニティメンバーの願いや、時と場所のさまざまな要請に応じて、大小にかかわらず次の基本的な方針に正確に則って伝法会の運営を計画しなければなりません。

- ① まず、伝法会の重要性や目的をすべてのコミュニティメンバーに広報し、はっきりと理解してもらうことです。
- ② 個人であれ、グループであれ、特定の伝法会のスポンサーを希望する者は、まずガンチーに伝え、ガンチーとともに法会の場所や日程、そのほか必要な事項を決めなければなりません。
- ③ ガンチーとスポンサーは伝法会の運営にかかるすべての責務を共同で引き受け、伝法会が完璧におこなわれるように期さねばなりません。
- ④ 個人であれ、グループであれ、すべてのコミュニティのメンバーは、したいと思う寄付や贈り物だけを師やコミュニティのためにすべきで、彼らに定められた参加費を課すべきではありません。
- ⑤ スポンサーとなる者は、何らかの報酬やカルマの報酬を求めず、ブッダの継嗣たる菩薩のすぐれた行為に学び、コミュニティメンバーの前で、偉ぶった態度をとったり、自分がスポンサーであることを示したりしないことが重要です。
- ⑥ 師とガンチーとすべてのコミュニティのメンバーは、このようなスポンサーの功德をよろこび、彼らが無尽の幸福を得られるようにと、その気持ちを表します。

以上の六点はサマンタパドらの六界の原則に基づいており、私、ゾクチェンパであるチューギェル・ナムカイ・ノルブは、すべてのゾクチェンコミュニティのメンバーに、注意深さと覚醒をたもち続ける方法として贈るものです。

吉祥あれ！

CHÖGYAL NAMKHAI NORBU THE VIRTUES OF GENEROSITY AND DONORS

There are many stories that tell how in ancient times, when Buddha Shakyamuni was alive, so-called khyimdag (wealthy householders) or jindag (donors) invited the Buddha and his retinue to their countries, and the Buddha transmitted the sacred Dharma to those fortunate beings. These wealthy individuals were putting into practice generosity, which is the first of the six paramitas, and gathered a vast accumulation of merits. This should be recognized as the unsurpassable behavior of a Bodhisattva. We can understand this by the following examples.

A very famous story in the Bodhisattva Vehicle tells that once, at the time of Buddha Shakyamuni, in China there was an important and wealthy householder called Hashang. He had very strong devotion and desire to invite the Buddha from India to China, but since the distance between the two countries was so great, and travelling so difficult, he understood that his desire was very hard to realize. Thus he remained with the thought, "What can I do about it?" Then a wise follower of the Buddha advised him, "Even though it is very difficult for you to invite Buddha Shakyamuni in person from India to China, since the Buddha is omniscient, invoke him one-pointedly and invite him one day for lunch. The Buddha and the Arhats of his retinue who are endowed with miraculous powers will arrive for the midday meal!"

The great householder Hashang arranged everything as advised, and when the time for the midday meal came, the Buddha together with the Arhats endowed with miraculous powers, known as the "sixteen elders", arrived at the house of Hashang and partook of the food, thus completely fulfilling the wish of the great householder. Today, in most of the Buddhist sacred places in China and Tibet there are representations of the sixteen elders, and they all originate from the story of when the Buddha with his retinue travelled to China miraculously. The opportunity which the householder Hashang had to invite the Buddha and his retinue was due to an enormous accumulation of merits. Therefore from that time, the custom arose to place a big or small statue of Hashang in all households in China, Tibet, and Mongolia, with the belief that, thanks to the power of the vast merits produced by Hashang, in every house where his statue was displayed all good things such as prosperity and wealth would naturally increase. For this reason the representation of Hashang is very widespread in all regions. However, most people do not know Hashang's story, and in the Western world it has also happened that those who possessed such a statue believed it to be a representation of the Buddha.

In the histories of the teaching of the Secret Mantra it is told that once, when Buddha Shakyamuni was alive, in the kingdom of Uddiyana there was a very powerful king called Indrabhuti. He had very sincere faith and devotion to the Buddha and therefore he invited some pandits who were disciples of the Buddha and honored them as royal priests. One day the king said to the royal priests, "I have the greatest desire to invite Buddha Shakyamuni to the country of Uddiyana, but as the distance between India and Uddiyana is very great, travelling is not safe, and so forth, it seems that I will not have the fortune to meet the Buddha, and that we do not have the merits to make the Buddha come to the land of Uddiyana. Alas! What can we do?"

Thus he lamented, but the pandits who were present advised him unanimously, "Since Buddha Shakyamuni is omniscient, he must surely know about your wish. He is endowed with miraculous powers, therefore if you invoke him with fervent devotion and invite him for the midday meal, the Buddha will arrive here for lunch miraculously. Thus you will be able to meet the Buddha!"

The king of Uddiyana arranged the midday meal perfectly as advised by the royal pandits, and prayed one-pointedly to the Buddha. When the time for the midday meal came, the Buddha arrived at the royal palace of Uddiyana together with his retinue endowed with miraculous powers. When the Buddha and his retinue had finished their meal, they recited:

Through the power of this vast offering May all beings attain spontaneous enlightenment, and may all those who have not been liberated by previous Buddhas Be liberated by this act of generosity.

After this dedication and invocation, the king of Uddiyana addressed the Buddha, "Bhagavan Buddha! I have an immense desire to follow your teaching and reach the state of supreme liberation. However, since I have the responsibility to look after both the kingdom and my family, there is no way for me to renounce this and be ordained as a monk, and thus to practice your teachings."

Bhagavan Buddha replied, "Great king! Following and practicing the sacred teaching must be in accordance with the capacities of individuals. Since there are various capacities, it does not mean that all those who enter the sacred Dharma must necessarily abandon their families, become monks and practice solely according to the path of renunciation. There are also profound upadeshas for individuals of high capacity who can attain enlightenment through the path of transformation, without renouncing emotions and enjoyments."

Then the king of Uddiyana asked, "Supreme teacher, please teach me this extraordinary teaching!"

Accordingly, the Buddha saw that he was a special disciple and in an instant manifested as the mandala of Shri Guhyasamaja, both as the dimension and its deities inside, and transmitted the complete upadesha of the profound path of Vajrayana transformation. This is narrated in the history of the Guhyasamaja. Thus, also from the origins of the diffusion of the Secret Mantra teaching we can clearly understand the importance of being a donor.

When Bodhisattvas, the offspring of the Buddhas, enter the Mahayana path and apply sublime Bodhisattva behavior, they engage in the famous "six paramitas": generosity, morality, patience, diligence, meditation, and discriminative wisdom. The first of the six is the paramita of generosity, which is subdivided into three aspects, the gift of the teaching, the gift of material things, and the gift of protection from fear.

The gift of the teaching

The supreme generosity is the gift of the sacred teaching for saving sentient beings from the great ocean of suffering. Of course the highest generosity is the "gift of the teaching", when teachers who are able to directly teach the path of liberation perfectly transmit the sacred Dharma to other beings voluntarily taking care to benefit them. Nevertheless, if one does not have this capacity, even bringing about with pure intention the favorable conditions for teachers to

transmit the Dharma, or helping in various ways, directly or indirectly, so that unfortunate beings who lack the favorable conditions for receiving the Dharma may obtain the possibility of receiving it, are extraordinary "gifts of the teaching".

The gift of material things

The gift of material things means to make material offerings, large or small, with generosity, without hoping for an immediate or karmic reward, and without the concept of the giver, the receiver and the giving, to any beings afflicted by poverty. As far as making the "water offering" to the beings who dwell in the ocean, or the "burnt offering" to those beings who feed on smell, all are included in the "gift of material things". In reality, wealthy householders who have the courage to make the supreme offering, by giving to destitute students the favorable conditions to listen, study, and practice the sacred Dharma, certainly show unsurpassable excellent behavior in which the gift of the teaching and the gift of material things are inseparable.

The gift of protection from fear

All beings are afflicted by the famous "eight and sixteen fears" until they die. Giving assistance and protection from these fears as much as one can, directly or indirectly, is known as the gift of protection from fear. Nevertheless, in the excellent behavior explained above in which the gift of the teaching and the gift of material things are inseparable, also the gift of protection from fear is naturally included. In fact, all of us are miserable beings subject to karma and emotions, imprisoned in the net of infinite suffering of the ocean of samsara, always afflicted by continuous fears, absolutely similar to animals in the hands of a butcher. The only method to release us from all this is the sacred Dharma, and the Dharma has to be received from a supreme teacher, and listened to, studied, and practiced in order to integrate it into ourselves and achieve the state of liberation. Therefore, to offer destitute beings the necessary conditions to follow the sacred Dharma and liberate themselves from the fears of samsara is certainly an extraordinary "gift of protection from fear". Being such the nature of the three kinds of gifts, and especially of the gift of the teaching, it is very important that we, while living in the dualistic vision, precisely put into practice this excellent behavior, and follow the principle by which "behavior must be according to the place and time".

The way to put into practice this excellent behavior

Whenever, in any country of this world, we want to invite a Master who teaches the pure sacred Dharma and organize a teaching retreat, whether big or small, the indispensable preliminary step is that the Gakhyil, who has the responsibility for the Dzogchen Community, be it large or small, jointly (decides to) completely fulfill the wishes of the Community. From ancient times until now, in the eyes of all human beings, it has always been clear that trying to achieve worldly riches, power, position, and so forth, by means of the Dharma is a type of behavior contrary to the Dharma, while undertaking hardships and applying perseverance as much as possible for the sake of the Dharma is a type

of behavior corresponding to the Dharma. However, it is very easy to understand that if someone, for the sake of the Dharma, imposes an enrolment fee on those who wish to receive the Dharma, this is contrary to correct behavior. Nevertheless, in our present condition, if we have to invite a Master to a country in order to fulfill the wishes of the students, there are many expenditures, such as those for the Master's travel and the stay, for the place where the retreat is to be held, and so forth. If we lack these factors, it is clearly evident that there is no way to establish a teaching retreat in that place. Although making all participants of a teaching retreat pay for all the expenses of that retreat is not in complete accordance with the principle of the sacred Dharma, because of the conditions of the place and time, it has been considered indispensable to adopt this system, and therefore the necessity has arisen for all students to pay a sort of enrolment fee in order to attend a teaching retreat.

In the future, in order to be in total accordance with the principle of the sacred Dharma and to be able to put into practice in an authentic way the "behavior according to place and time" without leaving it as a mere talk, any Gakhyil of the Dzogchen Community that, on the basis of the wishes of Community members and of the various necessities of the place and time, has to plan the organization of a teaching retreat, whether big or small, must first of all follow this fundamental procedure:

- 1) First of all the particular reason or importance of that teaching retreat has to be widely communicated to all Community members so that a clear understanding of it may arise in all those who are interested.
- 2) Those who wish to sponsor the specific teaching retreat, either an individual donor or a group, must inform the Gakhyil in due time, and then the Gakhyil together with the sponsor should decide the place and time of the retreat, and all its necessary factors.
- 3) The Gakhyil and the sponsor must jointly take full charge of the teaching retreat, and ensure that all the activities of the retreat will be perfectly accomplished.
- 4) All Community members, both as a group or individuals, will only make donations and presents to the Master and to the Community according to their wishes, and no specific enrolment fee will be requested.
- 5) It is important that the sponsors, without wishing for an immediate or karmic reward, train in the excellent behavior of the Bodhisattvas, scions of the Buddhas, and that they do not even show an air of self-importance in front of the Community for the fact that they are sponsors.
- 6) The Master, the Gakhyil and all the members of the Community will rejoice in the merits of such sponsors, and properly express the wish that they may attain inexhaustible happiness.

These six points which are related to the principle of the six spaces of Samantabhadra, I, the Dzogchenpa Chögyal Namkhai Norbu, offer to all the members of the Dzogchen Community as a means to keep presence and awareness alive. May good things increase!